チャペル週報

No. 6

2012 . 5 .14 ～ 5 .18

あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、いちばん上になりたい者は、すべての人の僕になりなさい。

（マルコによる福音書 10：43－44）

大学図書館屋上より

関西学院宗教センター

☆チャペル・スケジュール☆

時間 10：35～11：05　　場所 各学部チャペル

5月 14日(月) **神** 石　原　　等（相生教会牧師）
経 舟　木　　譲（宗教主事）
人 音楽チャペル　混声合唱団エゴラド
聖和 聖書物語「モーセの誕生」

5月 15日(火) 大学合同チャペル「総主題：建学の精神」10：20～11：20
西宮上ケ原キャンパス　会場：中央講堂
「『建学の精神』はなぜ必要か」 井　上　琢　智（学長）
西宮聖和キャンパス　会場：メアリー・イザベラ・ランバスチャペル
「聖和の伝統を受け継いで～その方、祈って、考えて、責任もって～」島田ミチコ（教育学部教授）
神戸三田キャンパス　会場：Ⅵ号館 101号教室
「ランバス先生の『Mastery for Service』」 Ruth M.Grubel（院長）

5月 16日(水) 大学合同チャペル「総主題：建学の精神」10：20～11：20
西宮上ケ原キャンパス　会場：中央講堂
「ランバス先生の『Mastery for Service』」 Ruth M.Grubel（院長）
西宮聖和キャンパス　会場：メアリー・イザベラ・ランバスチャペル
「『建学の精神』はなぜ必要か」井　上　琢　智（学長）
神戸三田キャンパス　会場：Ⅵ号館 101号教室
「神戸三田キャンパスと建学の精神」松 木 真 一（理工学部教授・宗教主事）

5月 17日(木) **神** 神学部カルト対策委員会
文 音楽チャペル　混声合唱団エゴラド
社 「学ぶ」とはどういうことか②　打　樋　啓　史（宗教主事）
法 栗　林　輝　夫（宗教主事）
経 経済と人間①　東　田　啓　作（経済学部教授）
商 山　本　俊　正（宗教主事）
国 English Chapel　山　本　雅　代（国際学部教授）
聖和 「手話ということば」 手話部たんぽぽ
総 井　上　一　郎（総合政策学部准教授）

5月 18日(金) **院** 中　田　道　隆（神学部M２年）
神 上ケ原ハビタット
文 English Chapel　Andreas Rusterholz（宗教主事）
経 経済と人間②　市　川　文　彦（経済学部教授）
人 共に生きる④　才　村　　純（人間福祉学部教授）
聖和 田　淵　　結（教育学部宗教主事）
理 「山べにむかいてわれ、目をあぐ」 松　木　真　一（宗教主事）

◇ランバス早天祈祷会　8：20～8：40　　ランバス記念礼拝堂（上ケ原）
5月15日（火）宗教運動のために　　杉　山　直　人（宗教活動委員会委員長）
5月18日（金）法学部のために　　高　島　千　代（法学部教授）

Dr. Lambuth's "*Mastery for Service*"

Ruth M. Grubel

As you may already know, we are celebrating the 100th anniversary of our school motto, *Mastery for Service* this year. It was in 1912 that Dr. C.J.L. Bates proposed this motto for the newly established College Department, which had two courses, commercial and literary. Although Dr. Bates was the one who introduced this motto, many others have demonstrated through their lives and actions, what the meaning of *Mastery for Service* is.

In my opinion, one person who truly embodied the spirit of *Mastery for Service* was our school's founder, Dr. Walter R. Lambuth. He was no longer at Kwansei Gakuin when Dr. Bates arrived from Canada, but throughout his life, Dr. Lambuth worked hard to be a better servant for others. Some examples found in his biography by W.W. Pinson demonstrate this attitude.

Since childhood, Walter Lambuth wanted to be a missionary, but he decided that in order to meet the needs of people in China and other places in the world, he should study medicine as well as theology. He graduated at the top of his class at Vanderbilt University, and continued to study medicine whenever he could, in order to use the most recent medical knowledge for his patients. He believed that all people, including the poorest, deserved his best care.

After working in China for nine years, Dr. Lambuth arrived in Japan, where he was not able to practice much medicine, but in order to work as a minister and educator, he needed to be able to communicate. Having grown up in China, his Chinese language ability must have been excellent, but he had to begin from zero to learn Japanese. According to one of his Japanese friends, Dr. Lambuth did not waste any time before studying the language. At every opportunity, such as during travel, or between meetings, he would study vocabulary, and asked many questions of his friends. He wanted to be able to speak in public in Japanese as soon as possible. Although he may not have "mastered" the language during

the four years he was in Japan, Dr. Lambuth tried his best to communicate his concern and the good news of the Bible to the people in their own language.

Eventually, Dr. Lambuth became a Bishop of the Methodist Episcopal Church, South with responsibilities for world missions. Among the principles that guided him was the firm belief that the "best, ablest, and most broadly cultured men specially trained for the work," should be sent as missionaries. In other words, to serve the needs of people around the world, the Church should select and train people who were "masters" in their fields.

As members of the Kwansei Gakuin community, we are inspired to become the best we can, morally and intellectually. Let's take our founder's example to encourage us on our own journey.

(Chancellor)

「建学の精神」はあなたにも必要？

井　上　琢　智

1889年に神戸原田の森に生まれた関西学院は、創立者を南メソヂスト監督教会の宣教師 W.R.ランバスとし、神学部と普通学部（後に中学部と改称）とからなる小さな私塾のような学校であったことから分かるように、その「建学の精神」を「キリスト教主義 'Principles of Christianity'」におきました。この原語が示すように、「主義」とは「原理」のことであり、その原理も複数であることは、今なお注目しておく必要があります。そこにはキリスト教を基礎とするものの、「寛大さ 'magnanimity'」（ベーツ第４代院長のことば）が重視されています。ただ、その「寛大さ」は「よい意味での家族主義的な暖かい雰囲気」や「相手の人格を認めて干渉しないという消極的」なものではなく、さらに進んで「相手を自分自身に対する根本的な問いとして真摯に受け止めるような能動的」なものでなくてはなりません。

さらにこの「建学の精神」は、「常にその時々のわれわれの具体的な現実の中で問い直され、具体化される努力が払われるのでなければ、死語」となります。まさ

に「建学の精神」の持続と浸透は、日々の私たちの「運動‘movement’」でなくてはなりません。漕ぐのを止まれば、倒れる自転車のようなものなのです。この123年に渡って、関西学院が教育機関として存続できたのは、その歩みに遅速はあるものの、先人たちが絶えず漕ぎ続けたからなのです。

ところで、「建学の精神」の役割は、関西学院という教育機関だけのことではありません。実は、そこに属する人びとすべての日頃の生き方にも通じるものなのです。人には生まれたときから与えられた「賜物」「天分」「才能」があります。私たちは自分だけの内なる「建学の精神」を見つける必要があります。しかし、加えて、それらを開花させるには、日々の私たちの絶え間のない「運動‘movement’」が必要なのです。まさに「高貴な粘り‘Noble Stubbornness’」が求められているのです。今からでも遅くありません。一緒にすぐにでも始めましょう。

（学長）

神戸三田キャンパスと建学の精神

松　木　真　一

神戸三田キャンパスの理工学部と総合政策学部は、今年も合わせて1100名を超える新入生を迎えました。彼ら新入生たちは西宮のキャンパスの新入生とともに関学大生として新しく歩み始め、もう１ヶ月半が過ぎました。関学唯一の理系・理工学部は現代科学技術文明の最先端で研究研鑽を通して、人類の進歩に貢献しようとしています。総合政策学部は現代の日本・世界の山積みの課題難題と向き合い、現実的実践的な解決の道を探求し続けています。私たちの直面している現況―この国が、激しく揺れ、こわれ始め解体し始めていくような不安感と危機的な状況のただ中で、両学部生に求められている期待は他学部生同様、限りなしです。新入生がこのキャンパスでこれから学び研鑽する意義は、この意味で絶大なものです。

学び研鑽とはいっても、それはただ漠然としたものでも知識や業績の積み重ねでもありません。そこには終始、一つの明確な理念が貫かれています。建学の精神として簡潔に表された「マスタリー・フォア・サーヴィス」がそれです。この標語は、

関学の長い歴史の中で在学生、同窓生、そして多くの人々に多大の影響を与えてきた素晴らしい影響史を生み出しています。今もそうです。その理由は、この語が単なる人道的スローガンにとどまらず、一層深い宗教的深みを持った語であるから、と思えてなりません。人の心の深みにまで届き、社会や世界や歴史の根底にまで届き、その根底から文字通り「仕え」、そのために学び「熟達」する、という意味で。

しばしば引き合いに出す比喩ですが、夏の夜に親戚の田舎の海辺を散歩していたときのことです。民家の並ぶ明るい場所から、海に突き出ている突堤を暗い沖のほうまで歩いてふと見上げると、満天の星が美しく輝きわたっている。再び戻って民家の明るいところで見上げても、もうあの星空はない。つまり、自分の足もとや周辺が暗くなればなるほど、かえって見えてくるものがあります。逆に自分や周辺が明るいほど、見えなくなるのです。

私たち日本人は今、大変な状況の中にいます。仮設住宅や避難場所で生活している方がた、被災された方がたは、今もなおつらい喪失感と虚無感に満ちた暗闇の中におられます。共に分かち合い共有する中で、しかしそれだからこそ明るい可能性を信じて、勇気を出して力強く前進して行きたい、と願わざるを得ません。一人ひとりが関学で学ぶ学びと研鑽を通して、直面する現状の暗さの底のところから仕え、また地域や社会、周辺のあるいは身近な人たち、そして自分自身の心にもしばしば重い影を落とす闇のところから支えあい仕えあい、そのために学びあう、そのような深い研鑽と活躍を心から願っています。「この世にあって星のように輝いて」（フィリピの信徒への手紙２章15節）活躍し続けてほしい、と祈っています。

（理工学部宗教主事）

聖和の伝統を受け継いで
～その方（ほう）、祈って、考えて、責任もって～

島　田　ミチコ

関西学院と聖和大学が合併し、教育学部が発足して今年で４年目を迎え、１年生から４年生まですべて関西学院大学教育学部の学生となりました。この教育学部が

ある聖和キャンパスは、聖和大学が132年もの長い間紡いできた歴史があります。聖和大学は神が私たち一人ひとりを愛してくださっていることを知り、イエス・キリストが示された生き方にならって、他者ー特に幼い者や社会的に弱くされた者たちーに仕える働き人を養成するために建てられました。そして、その建学の精神はAll for Christ「キリストに心を向けて」や、Seiwa College for Christian Workers「キリストの働き人を育てる聖和」という言葉で表してきました。また、教育理念としては一人ひとりの全人的で調和のとれた成熟のために３つのＨーHead：真理の探究、Heart：自分を愛し人を愛する心、Hand：奉仕と実践ーを大切にすることを掲げ、世に多くの働き人を送り出してきました。この建学の精神や教育理念は関西学院の建学の精神Mastery for Service「奉仕のための練達」と相通じるものがあります。教育学部は両大学の精神をしっかりと受け継ぎ、さらなる発展をしながらキリストのはたらき人として、また、世界市民として世に送り出す学部でありたいと願っています。

春季宗教運動の総主題は「建学の精神」となっています。そこで、聖和大学の歴史で、特に幼児教育に貢献され、宣教師でもあられたMargaret M.Cook について触れたいと思います。彼女は米国ジョージア州ロマの牧師の家庭に誕生し、熱心な信仰生活を送っていました。当時アメリカでは幼児教育への関心が高まり、アメリカ婦人宣教師のこの方面における活動には目覚ましいものがありました。彼女も幼児教育専門の宣教師を志し、特にキリスト教に基盤をおいた子ども中心の保育を重視しました。そしてヨハネによる福音書10・16「わたしには、この囲いに入っていないほかの羊もいる。その羊をも導かなければならない。その羊もわたしの声を聞き分ける。こうして、羊は一人の羊飼いに導かれ、一つの群れになる。」という聖書の言葉に応えて、日本の幼児教育の発展に生涯をかけた一人の女性でした。広島、ランバス時代を通じて34年間保育のために尽くしました。この間「その方、祈って、考えて、責任もって」と指導した言葉は今も語り継がれています。

（教育学部教授）

●チャペルオルガニスト募集（神戸三田キャンパス）

関西学院では毎年チャペル・オルガニストを募集しており、本年は５月26日（土）にオーディションを行います。採用されますと個人レッスンを受けることができ、チャペルの奏楽をはじめ、発表会、研修会、コンサートなどを通して、教会音楽を中心とした幅広い知識、技能を身につけることができます。

応募方法：「募集要項」「応募用紙」を吉岡記念館事務室宗教センター、神戸三田キャンパス事務室（Ｉ号館キャンパス担当）で受け取り、オーディションの応募用紙を提出してください。また、電子メールの添付ファイルでも受け付けます。

☆「募集要項」「応募用紙」がダウンロードできます。
http://www.kwansei.ac.jp/c_christian/index.html 学生団体の紹介 にあります。

募集期間：５月７日（月）～５月24日（木）の事務室開室時間
お問い合わせ・資料請求：吉岡記念館事務室宗教センター
電話：0798-54-6018、　E-mail：organist@kwansei.ac.jp

●ランバスチャペル・ヌーンコンサート

西宮上ケ原キャンパス正門入って右手に見えるチャペル「ランバス記念礼拝堂」では、礼拝はもちろん、コンサートや式典、講演会、卒業生の結婚式などが行われています。５月に入ると、関学を代表する音楽団体による恒例のヌーンコンサートが開かれます。お昼休みのひととき、どうぞ耳を傾けてみてください。

５月21日（月）関西学院バロックアンサンブル
５月28日（月）関西学院交響楽団弦楽アンサンブル
５月29日（火）関西学院聖歌隊
６月４日（月）関西学院大学応援団総部吹奏楽部
６月５日（火）関西学院交響楽団管楽アンサンブル
６月12日（火）関西学院ハンドベルクワイア
６月14日（木）関西学院ゴスペルクワイアPower Of Voice

いずれも12時50分～13時20分
会場：ランバス記念礼拝堂（西宮上ケ原キャンパス）
主催：宗教センター・宗教音楽委員会

●大阪梅田キャンパスチャペル

阪急梅田駅から徒歩すぐ、アプローズタワー14階の大阪梅田キャンパスでは、授業期間中の毎週金曜日にチャペルアワーを開催しています。（18：00～18：20　1405教室）

5月18日（金）　田淵　結（教育学部宗教主事、宗教総主事）
25日（金）　樋口　進（宗教センター宗教主事）

●関西学院会館の日曜礼拝

授業期間中の第二・第四日曜日に、教職員と学生有志による礼拝が行われます。一部英語を用いるバイリンガル形式です。どなたでも参加できますのでどうぞお越しください。

５月27日（日）　午前10時～11時
関西学院会館ベーツチャペル

●ＣＤ・ＤＶＤライブラリー

吉岡記念館内の宗教センターには、教会音楽、キリスト教に関するＣＤやＤＶＤを備えています。本学学生及び教職員（学生証または身分証明書必要）であればどなたでも利用できますので、希望者は事務室までお越しください。